

大逆事件後百年・刑死後百年に思う

—二〇一〇年から二〇一一年へ—

岩崎 稔

(一) 大逆事件後百年に思う

大逆事件(一九一〇)百年にあたる昨年、私は大逆事件に関する二つの催しに参加した。一つは一月三〇日に行われた「大逆事件の真実をあきらかにする会」主催の「大逆事件百年追悼集会」であった。もう一つは、四月二十九日に東京エデユカスで行われた「啄木祭」(新日本歌人協会主催)の韓国併合百年・大逆事件百年を記念した「石川啄木と大逆事件」についての講演会であった。昨年は大逆事件百年という節目にあたっており各地でシンポジウムや集会が開催された。一月九日には「大逆事件百年を語る」この百年、これからの百年」と題したシンポジウムが開催された。六月十九日には和歌山県新宮市では「大逆事件一〇〇年を考える」基調報告とシンポジウムがあった。また八月二日には「埋もれたる声・大逆事件から一〇〇年」(NHK 教育番組)が一時間の番組枠で、放映された。事件後百年の節目を迎えて幸徳秋水や森近運平、高木顕明など毎年行われている墓前祭は勿論のこと大逆事件についての出版も相次いだ。朝日新聞夕刊に早野透記者の「大逆事件残照」(ニッポン人脈記)が連載され始めたのは前年五月、田中伸尚氏の「一〇〇年の道ゆき」が雑誌『世界』(岩波書店刊)に掲載され始めたのが前年の一月号からであったが、その連載が、昨年三月号で完結し、五月には『大逆事件 死と生の群像』として岩波書店から刊行された。また毎日新聞に長期間連載(二〇〇七・七〜二〇〇九・二)されていた作家の辻本雄一氏の大石誠之助をモデルにした槇隆光が主人公の小説『許されざる者』(毎日新聞刊)も昨年六月、上下巻の単行本として刊行された。また追悼集会で『あきらかにする会ニュース』が、ばる出版から復刻されることになること、五十年間の「大逆事件」に関する資料や文献、研究状況、あるいは再審請求の経過を知るための貴重な資料が閲覧可能となった。大逆事件後百年という節目の年に、追悼集会に参加でき、また事件に連座させられた遺族とも会えて「大逆事件後百年」のいまを、実感した。特に「追悼集会」で話題となったことを含め、「大逆事件後百年」のなかで、特に印象に残った三つのことをここに記してみたい。

第一に、『大逆事件の真実をあきらかにする会ニュース』第四九号でも、「特集・新資料発見」として「森近運平夫妻関係弓削家資料」が一部紹介されているが、二〇〇九年八〇〇点をこえる大量の貴重な資料が森近運平の妻繁子さんの実家である弓削家(岡山県浅口市佐方)で発見された。その発見された資料のなかの一つに、印象深い森近運平のながきがある。まだ森近在若かった頃のはがきである。この発見資料のなかで「注目すべきは、双方の家族や親族からの書簡があるのは当然として、以外なことに繁の実兄である弓削新(当主)あての運平書簡・繁子書簡が多数あることだ」とされるが、この弓削新宛のはがきである。「先日來は度々御手紙を下さいましてこまごまとの御論し難有拝謝致します。小第一身の処置も世の所謂青年が徒らに青雲の志を抱ひて大言壯語する類とは違ひ多少世態

人情も知り父母妻子に対する責任も覚って居ますから余り無暗なことはせぬ積りです。只今の所少々の金銭に追隨して私の『大自覚』たる社会主義を捨て居る訳に行かぬ迄のことです。何卒此辺の所充分御了察を願ひます。私の精神は到底誤解されて居るの外はなからうと存じます。唯一つ私の心の内に「何の為に生きて居る」と思ふ其何の字を御考へ下さいます様御願ひするの外ありません。実に申訳なきことですけれど少しの間おゆるしを願ひます。」(明治三八年一〇月二十九日、弓削新あて運平書簡)

『何の為に生きて居る』と思ふ其の何の字を御考へ下さいます様・・・この運平の真情の叫びに、胸を衝かれた。この「何の字」こそが、運平にとつての「生きて居る」という核心に位置していた真情であつたからである。しかも、あえて困難な道を進もうとしていた運平に、その「何の字」を欠落させて生きることを強制し、かつその「何の為に生きて居る」かの、「何の字」を奪つたのが、まさに大逆事件ではなかつたのかと、その思いが、頭のなかを駆け回つた。運平が、何の為に生きて居るのかと問う、問いと表裏一体をなす人間としての行き方の根底にある「思想」や「信念」を、持つこと自体が犯罪であり、「大逆罪」に価することであつた、このことの意味を「思想の暗殺」(田中伸尚)と呼ばずして、何と呼ぶべきだろう。そのような思想を持つことが許されなかつた時代を思つた。

一九一〇(明治四三年)一二月二五日検事の諭告で、平沼大審院検事は「被告ハ無政府主義者ニシテ、其信念ヲ遂行スルノ為大逆罪ヲ謀ル動機ハ信念ナリ」と述べている。大逆事件は思想弾圧事件である。思想＝信念が問題で、かかる思想をもつことが、弾圧の対象なのだ、平沼はいつている。そこに大逆事件の本質がある。証拠など必要はない。動機は信念だという、何と、無謀な裁判であつたことだろう。

第二に、追悼集会で、「大石誠之助の名誉市民推挙に關するお願い」との要望書が二〇〇九年一月、「大逆事件」の犠牲者を顕彰する会(会長二河通夫)によつて新宮市長に提出されたことが、報告された。「大逆事件」の犠牲者の復権と顕彰の運動は連座者の各地で行われているが、この運動のなかで思うことは、大逆事件で殺された人たちは、その本人の無念さのみならず、その家族にも苦しみを与えた。しかも「石をもて追われる」ような、悲惨な生活を強いられた。しかしながら、その人たちに何の罪があるのか、「大逆事件」を受けた人たちは、世間から「冷たい目」を向けられ肩身の狭い思いで生きざるを得なかつた。しかも、紀州新宮の大石誠之助も、たとえば高木顕明も、部落差別に反対し、非戦論を唱え、娼娼運動に献身した郷土の《先駆者》であつた。そういう人たちがなぜ？悲惨な生活を送らなければならなかつたのか。ここに最大の問題があるように思つた。

復権というのは正確には「大逆」という被り物を脱ぎ捨てたあとに証明されなければならぬ。罰せられるべきは、大逆罪で、彼らを「殺した側」にある。最も卑しむべき人間の側にあるのだ。罰せられたから「極悪非道な悪人」なのではない。罰した側の人こそが「極悪非道な悪人」まのだからということが証明されなければ、真の復権はない。復権の意味は、そこにあるように思う。復権されたからといって「汚名が雪がれたわけではない」さらに一步を進めて「大逆事件」犠牲者に正当な位置を与えなければならない。

大石誠之助は「名誉市民」に価する。大逆事件の報に接して、佐藤春夫は『愚者の死』という詩を書いて、大石誠之助を悼んだ。

千九百十一年一月二十三日

大石誠之助は殺されたり

げに厳肅なる多数者の規約を

裏切る者は殺されるべきかな

死を賭して遊戯を思ひ

民俗の歴史を知らず

日本人ならざる者

愚なる者は殺されたり

『偽より出でし真実（まこと）なり』と

校舎台上の一語その愚を極む

われらの郷里は紀州新宮

彼の郷里もわれらの町

聞く 彼が郷里にして わが郷里なる

紀州新宮の町は恐懼せりと

うべさかしかる商人の町は歎かん

―町民は慎めよ

教師らは国の歴史を更にまた説けよ

与謝野鉄幹は『誠之助の死』という詩で書いた。

大石誠之助は死にました

いい気味な

機械に挟まれて死にました

人の名前に誠之助は沢山ある

然し 然し

わたしの誠之助は唯一人

わたしはもうその誠之助に逢はれない

なんの 構ふもんか

機械に挟まれて死ぬような

馬鹿な 大馬鹿な

わたしの一人の友達の誠之助

それでも誠之助は死にました

おお 死にました

日本人で無かった誠之助

立派な気ちがいの誠之助

有ることか 無いことか

神様を最初に無視した誠之助

大逆無道の誠之助

ほんにまあ 皆さん いい気味な

その誠之助は死にました

誠之助と誠之助の一味が死んだので

忠良な日本人は之から気楽に寝られます

おめでとう

当局の眼をくらすために風刺詩として書かれているが、向こう側で、嗚咽が、聞こえてくるような二つの詩である。与謝野鉄幹や佐藤春夫らに衝撃を与え、二つの詩をつくらせた大石誠之助は、確かに「名誉市民」にするに相応しい人であるだろう。ここでも「大逆」の被り物を捨て去らねばならないようだ。

第三に、今年の追悼集会に元気な姿を見せ挨拶もされていた近藤千浪さんが、亡くなられたとの、突然の訃報が、私には衝撃であった。この訃報を知った時、真っ先に頭に浮んだことは「志を継ぐ」という言葉であった。

今新宮には顕彰碑の横に「志を継ぐ」との言葉が刻まれた碑が建立されているが、この言葉をそのまま千浪さんに返したいほどであった。祖父は堺利彦、母はその娘堺真柄、そしてその娘の近藤千浪さん。「大逆事件」の刑死の直前に、幸徳秋水は「思うに百年後、私に代わって後世の人がいつてくれるだろう」との手紙を残し、森近運平も「後世の歴史家が事件の真実を明らかにしてくれるだろう」と述べ、百年後のいまに思いをつなげた。

百年前と百年後のいま、では、その百年の間に何が変わり、何がわらなかったか。「大逆事件」の犠牲者たちの復権と顕彰は確かに歩一歩とすすんでいる。しかし他方、いまだに「凍土の下」にあることも事実だろう。「刑の執行という冷酷な事実は、運平を信じていた村人に重くのしかかり、天皇に弓を引いた『逆徒』を印象づけ、かつての村の中にあつた運平像は、地中深く『凍土の下』にまで埋め込まれてしまった。一条の閃光の後の長い長い闇は、天皇観と『お上』という国家観の重なりがもたらしたものでしょう。処刑された運平と遺族には、さらに残酷な出来事が待っていた。」と田中伸尚著『大逆事件死と生の群像』は、述べている。

死者は何も語らない。だから、生きている者が、死者に代わって語る以外に道はない。追悼集会の会場になった正春寺には席に座れない人の、百名以上の人たちの熱気があふれていた。それが「大逆事件」百年後の、いまの確かな希望を伝えていた。「志を継ぐ」意味がそこにあつた。

(二) 大逆事件刑死後百年と内山愚童

二〇一一年で、内山愚童らが「大逆罪」の名で刑死させられてから、百年となる。大逆

事件後百年から刑死後百年へまた時代がひとつ移り行く時を迎えた。ここでは特に、厚木・愛甲にかかわりの深かった刑死者の一人内山愚童をとり上げてみたい。厚木・愛甲（神奈川県）には、日本の近代史に深くかわる二つの事件があった。その一つは、厚木・愛甲における自由民権運動であり、もう一つは大逆事件であった。

これらは共に明治政府による民主主義の根の根絶であったという点で、日本の近代史に深く大きな問いを残した事件であったといえるだろう。すなわち、自由民権運動の圧殺のうえに天皇制権力が確立し、他方で、この天皇制権力が「社会主義・無政府主義者」の抹殺をでっちあげた事件が、大逆事件であったからである。その故に、愚童らは刑死させられた。

厚木・愛甲にかかわった、この二つの事件は、日本の近代史に深くかわった事件であったのである。そのような意味で、厚木・愛甲で殆ど知られていない大逆事件刑死者の一人内山愚童の生涯（一八七四〜一九一一）と思想について、その生涯の出発点となった出家と修学の時代、厚木・愛甲時代の愚童を取り上げることが大きな意義があるだろう。

最初に、残された「宗門履歴」などから愚童とその叔父（母すがの弟）青柳賢道とその門弟たちの関係を追ってみた。

愚童は、明治三〇年（一八九七）四月一二日、叔父である天悉青柳賢道（謙堂）の紹介で、小鮎村上古沢（厚木市）宝増寺住職・坂詰孝童のもとで得度し、賢道の指導する三田清源院（厚木市）常恒会にて参禅修業を始める。同年一〇月、足柄下郡早川村（小田原市）の海蔵寺僧堂に移り、佐藤実英の室に入る。明治三二年（一八九九）二月、実英が「監理」（校長）をする曹洞宗第二中学林本科二年を修学、海蔵寺認可僧堂五カ年安居証明を得る。明治三三年（一九〇〇）冬、清源院に移り、賢道の後継・和田寿静（清源院第三六世）の下で立職、首座の僧位を得る。翌三四年一〇月、足柄下郡宮城野村（現箱根町）宝珠院で宮城実苗（清源院の末寺、広徳寺住職）に就いて嗣法、明治三五年（一九〇二）七月、永平寺にて転衣を許され住職の僧位を得る。明治三五年足柄下郡温泉村大平台（現箱根町）林泉寺に入り、翌年（一九〇四）二月、温泉村大平台、大光山林泉寺第二〇世住職に就任する。

この間、愚童が師事した坂詰孝童、佐藤実英、和田寿静、宮城実苗などはみな青柳賢道（一八五一〜一九三三）の後継や門弟たちであった。賢道は、嘉永四年（一八五一）三月一〇日、越後国長岡で生まれ、青柳茗圃の子として育てられ、辻頭高（駒沢大学の前身曹洞宗大学林総監・初代学長・清源院第三四世）に見出されて、弟子となり三田清源院（第三五世）に住み、のち愛甲郡依知村山際（厚木市）長福寺（第二〇世）に隠居した。昭和八年（一九三三）一月四日、長福寺で没している。管長にもなれるほどの稀有な高僧であったが、あえて栄達を求めなかったという。長福寺本堂には賢道の横額「福生於清約」（福は清約（清くつつましく）生きるにあり）が掲げられている。

愚童の生涯は大きく三つの時期に分けられるが、特に厚木・愛甲とのつながりが深い第一期は《愚童の民主主義形成期》の時代と特徴づけられ、第二期の《仏教社会主義》の時

代から第三期の《無政府主義》の時代へと思想形成をしていく、その出発点をなしている。彼の『平凡の自覚』は、その思想的出発点に位置する著述である。愚童の時代、その背景には、国民の内面の価値観までを独占的に支配した《天皇への絶対的権威が確立》されていた。だから、この価値意識からの解放は、われわれ一人一人の徹底した思想変革なしには実現されない。愚童は、この時代にあつて「個の自覚」とその主体形成を強調している。われわれ一人一人が思想変革を実現する主体をつくっていくことが、民主主義の根であるからである。

他方、大逆事件で、陣頭指揮をとった大審院検事局次長の平沼騏一郎は「動機ハ信念也」と言明し、実際には社会主義の「思想」を裁くことにあつたこと（そういう思想をもつこと自体が犯罪だとした）点は特に注意されねばならない。ここに大逆事件の本質がある。愚童が明治政府の生命線である「天皇制」を否定したのが、愚童刑死の本質であつた。

愚童は、明治四四年（一九一一）一月二四日に幸徳秋水ら一二名（管野すがは二五日）とともに処刑されたが、与謝野晶子は、大逆事件に際して「産屋なるわが枕辺に白く立つ大逆囚の十二の棺」と歌に詠んだが、その時からすでに百年が経つ。自由民権運動とともに深くかかわつた厚木・愛甲の、もう一方の大逆事件の意味が、いま問い直される時である。大逆事件の故に曹洞宗宗務院から「宗内擯斥」を受けた愚童は、その後、宗門によつて名誉回復と復権がなされた。箱根林泉寺には『平凡の自覚』の一節が刻まれた「顕彰碑」が建っている。大逆事件刑死後百年のいま、われわれは《民主主義の根の根絶》の意味をあらためて問い直す時期にきていると思うのだ。